

山丹（ヒメユリ）

《小坡の誕生日》 老舍

（七）学校で

学校に着いてからシャオポー小坡がやるいちばん大切な仕事は、けんかをすることだ。しかし、もし君たちがけんかをする理由を知ったら、小坡はけんかが好きで平和が嫌いだ、とは言わなくなるだろう。



小坡のけんかは、十回のうち九回半は正義を守り、他の人を守るためのものなのだ。特に女の子たちは、いじめられると先生に言いつけに行かないで小坡のところに訴えにやってくる。小坡は低学年だったが、不正を知るや勇敢に進み出て、相手の腕が電信柱より太かろうと、足が鉄や銅のように硬かろうとかまわず向かっていく。やっつけるぞ。ほかに言うことはない。腕が太いのや体が大きいのをいいことに人をいじめるなんて。よし、あいつらと勝負だ！

小坡が命がけになると、確かにものすごい。両手を上下に大きく振り回し相手の目を上に引きつけておいて、本当は相手の腹に頭突きを食らわせる。当然、十回のうち三、四回しかうまく当たらないが、もし命中したら、相手は三日間はバナナを気分よく食べられなくなるのだ！

小坡の頭はとっても硬い！ 君たちは覚えているだろう。小坡と母さんが市場に買い物に行くとき、小坡はいつも、どんなに重くともかごを頭の上に載せていたじゃないか。それに、ひまなときには、壁にはりつくようにして頭を地面につけて逆立ちをする。やりだすと十分間ぐらいはやっている。このようにして頭を鍛えているのに、その上に全身の力をこめるのだから、人間はもちろんのこと、

ヤギだって小^{シャオポー}坡の頭突きを食らったら、三日間は痛くてしかたがないに違いない。小坡の頭突きを食らった者が言うには、小坡のおでこが腹の皮にさわっただけで、腹の皮が背骨に張り付くようで、痛くてたまらないのだそうだ。

小坡は自分より背が低く力が弱い者には、絶対にこの「頭の力」を使うことはなかった。小坡が自分のおでこをたたき、相手の腹を指させば、相手はどうしようもなく、ただ謝るしか方法がなくなるのだ。

背丈や力が自分とあまりかわらない者に対しても、小坡は頭突きをすぐに使うことはなかった。げんこつで勝つほうがもっとかっこういいし、自分だけの特技を使って有利な戦い方をしなかったのだと示すことができた。やはり小坡は、何事においてもフェアプレイであることを大事にするのだ。

子供たちの中には、人をいじめるのが好きで、正々堂々とやらずに、こっそりと自分だけ利益を得ようとする者もいる。人に自分が間違っていると言われても認めないで、人から自分がやっつけられるかもしれないと聞くと、すぐに涙を拭きながら先生のところに行いつけに行く。小坡はいつも、このような子供たちには宣戦布告をしない。彼らが人をいじめているのを見たら、すぐに行ってげんこつを一発お見舞いするだけだ。当然たたかれた子供は先生のところに行き、先生は小坡を罰する。小坡は何も言わない。ただうつむいて先生からの罰を受ける。だが心の中ではこう思っている。「あの一発は効いたに違いない。少なくとも三日間は人をいじめようとはしないだろう」

「運動場の木の後ろで会おう！」というのが、正式な挑戦のことばだった。

このことばにはたくさんの意味がある。運動場の東側には一メートルほどの高さにぎっしりと刈りそろえられたヒメユリの茂みがあった。この赤い花と緑の葉のヒメユリの垣根の後ろには空き地がある。何本かの大きな木が緑の木蔭を作っていて、涼しく、人目につかなくて、戦闘の場としてはもってこいの場所だった。

ここに来て互いの力を競おうとする者は、勝とうが負けようが、けんかの初めでも終わりでも、先生に言いつけに行くことはできない。闘いが終わったあとは、勝者が「終わりだ、ごめんよ」と言うと、敗者も「終わりだ、ごめんよ！」と言う。もし勝負がつかなかったら、地面に倒れたまま、一、二の三で「終わりだ、ごめんよ！」と言う。こうすればけんかをしたとしても後くされがない。小坡はこの場所をよく使ったが、だれとも仲が悪くなることはなかった。

これからする話は、大きな声では言えない。小坡シャオポーのように可愛い子供でも、なんと時には賄賂をもらって、人の代わりにけんかをすることもあるのだ。

「小坡、ぼくの代わりに王牛児をやっつけてくれ！ 父さんのことを外国犬って言ったんだ！」一人の小さな悪魔の手に、五枚のタバコカードが握られていた。

「王牛児ワンニョアルをやっつけてくれたら、これ、みんなあげる。ぜんぶ新しいんだよ！」

小坡は頭を横に振ったが、その目は悪魔の手にくぎづけになっていた。

悪魔は一枚を渡した。小坡はちょっとためらっていたが、受け取った。そうしたら返すのがいやになったのだ。ほんとうに硬くて新しいカードだったのだ。

「最初にそれをあげとくよ。勝ったら残りの四枚をやる」悪魔は手を開いて見せた。すごい、まだ四枚もきれいなものがある。

「勝っても負けてもくれよ？」小坡の魂はすでに悪魔に買われてしまっていたのだ。

「負けても？ そりゃだめだ。勝ったらあげる！ 君はいつも勝つじゃないか、そうだろう？」悪魔のことばは甘くて魅力的だった。

「わかった。いつだ？」小坡は、完全に降伏してしまった。

「二時間目が終わったら、運動場の後ろで」

「じゃあそこで会おう！」小坡はカードをていねいにしまった。心が浮き浮きした。時間が来た。みんなが大きな木の下に集まってきた。

行け！ あれ。頭に力が入らない。頭突きをしても命中しない。げんこつもただ降り回しているだけで当たらない。相手のげんこつは雨のように降ってきて、体にあたり、ものすごく痛い。

げんこつは一回ずつ小^{シャオボー}坡の良心に打ちおろされているようだった。ただ痛いだけで、勇気がわき起こってこない。恥ずかしさを感じれば感じるほど、手足が乱れてしまう。げんこつが振りおろされるたびにこう言われているようだった。「人のカードが欲しくてけんかするなんて、恥を知らないのか」

ああ……とうとう小坡は倒されてしまった。王^{ワンニョアル}牛児は得意げに言った。「終わらだ。ごめんよ」

小坡も恥ずかしそうに言った。「終わらだ。ごめんよ」

「ちえ、ちえ、ちえ」と悪魔の声が出た。

これからこんなことはしない。なんて恥さらしなんだ。正義のために戦ったときにはとつても力が出た。勝とうが負けようが名誉なことだった。だが、何枚かのたばこカードのために戦っているとき、頭は豆腐のように柔らかく、心もどんなに苦しかったことか。それに、あとで耳に入ったのだが、もともと小さい悪魔が先に「王牛児の姉さんはねずみのようだ」と言ったので、王牛児は「お前の父さんは外国犬だ」と言い返したと言うのだ。

「小坡、李^{リサンヤン}三羊と戦ってくれ」とそのあと、また一人の悪鬼がきれいな模様のハマグリを持ってきて言った。

小坡は彼が言い終わらないうちに、手で目を覆って走って行ってしまった。

話を前に戻そう。小坡が校門を入り、門番のインド人のおじいさんに、新年にどんなごちそうを食べ、どんな面白い話を聞いたのかと尋ねていると、後ろから女の子がやってきて、小坡をひっぱった。振り返ってみると、同じクラスの^{シャオイン}小英ではないか。小英は涙をいっぱい流していた。おでこまで涙のつぶでいっぱいだ。

いったいどうやって、涙を上流すことができたのだろう。

「どうしたんだい、小英？」

小英はずっと泣き続けていて何回か口を開けたが、塩辛い涙がたくさん口の中に入って行って、話すことができなかった。

「どうしたんだい、小英、泣かないで。涙をたくさん飲むとご飯が食べられなくなるよ」

小坡は、妹の仙坡センボーがかんしゃくを起こして泣きわめいたときにご飯が食べられなくなったのをいつも見ていたので、涙を飲むのは食事をするのには良くないのだと知っていた。小英はピタリと泣き止んだ。ご飯が食べられなくなると聞いて心配になったようだった。小英はくやしそうに言った。

「あいつがぶったの」

「だれが？」小坡はこう聞くと、小英のことがかわいそうになった。

「張禿子チャントウズ！ここをぶったの！」小英は手を挙げて空中を指さした。

小坡は小英の頭を見たが、どこにも殴られた跡はなかった。ひょっとしたら張禿子は跡を残さずにぶつことができるのかもしれない。ともかく、小英の涙は本物だから、きつといじめられたに違いない。

「彼はさらに船をとっていったの。張禿子！」小英が言った。

小坡は少しばかりぼっとした。その船が張禿子と呼ばれているのか、張禿子が船をうばいどったのか。

「船？」

「紙で折った小さな船よ。張禿子」

小坡は、これはきっと人間の張禿子が船の張禿子をとったに違いないと決めた。

「先生に言いに行ったの？」

「行かない」

もう小英^{シャオイ}の涙は乾いていたが、指で目の周りをこすったので、黒い輪ができていた。

「よし、小英。ぼくが取り戻してきてあげる」

小坡^{シャオポー}はそう言いながら、インド人のおじいさんのスカートを手にとって小英の顔を拭いてやった。インド人のおじいさんは新学期で新しい腰布をはいてきたばかりだったので、じろりと小坡をにらみつけた。

「船が戻ってきてもだめ」小英は言った。

「どうして？」

「ぶつけれなきゃ！ 私のここをぶったのよ。張禿子^{チャントウズ}！」

小英はまた空中を指さした。

「小英、もしあやまったらぶたなくていいだろう」

小坡の態度は平和的だった。

「絶対にぶたなきゃだめ！ 張禿子！」

女の子というのはほんとうにめんどうを引き起こすものだ。小坡はまだ覚えている。あるとき妹の仙坡^{センポー}が、車を引いていた牛が自分のことをにらんだので、小坡に、牛をなぐってきてほしいと言ったのだ。万が一、牛がほんとうにけんかする気で向かってきたらあったらどうする。小坡に勝ち目があると思うかい？

長いこと言い合ったがだめだった。妹は言い張って一步も譲らなかった。最後に小坡はいいアイデアを思いついた。石板に牛の絵を描き、妹にそれを叩かせたのだ。こうして小坡は牛と闘う危険を回避することができたのだ。

「わかった、小英、まずは教室に行ってみよう」

小英と小坡が教室に入っていくと、ちょうど張禿子にぶつかった。張禿子は小坡が小英の手を握っているのを見るやその意味がすぐわかり、小坡が言い出す前に言った。

「運動場の木の後ろで会おう、小坡！」^{シャオボー}

「いつだ？」

「いますぐだ。やるか？」

^{チャントウズ}
張禿子の言い方にむかつとした。

「先に行っててくれ。服を脱いでから行く」

小坡は真っ白な新しい制服を着ていて汚すわけにはいかなかった。制服を脱いでいすに掛けた。カバンの中から宝物の赤い絹の布を取り出し腰に巻くと、堂々として見えた。それにズボンも汚さないですむ。

^{シャオイ}
「小英、ほら、これを巻くと張禿子よりずっと背が高くなっただろう？」

「ほんとだ！」

小英は小坡が戦場に出ようとしているのを見て拍手すると、それ以上何も言えなくなった。大きな木の下には、張禿子と小坡のほかにも何人かの子供たちがいて、みんな新しい制服を着て、地面に座って見物していた。葉っぱの間から差し込んでくる光が張禿子の髪が少ない頭の上にまだらの点を作っていて、まるで緑の点のある茶色のかぼちゃのようだ。張禿子は、髪は少なかったものの、力はいへんに強く、背丈は小坡よりもずっと高く筋骨隆々としていて、やるとなったら思い切ってやるタイプだ。しかし小坡はこのかぼちゃ頭のことなど心配していなかった。小坡は腰に手を当てて言った。

「張禿子、小英の船をはやく戻せ！ 早く戻さないと手遅れになるぞ！」

張禿子は小さな船を木の根元に置き、ズボンのベルトを締め直し、頭をさすり、息を大きく吸い込み、唇をなめ、こけの上の船を指さし、周りに座っている見物人を見て鼻をこすり、やっところ言った。

「やってやろうじゃないか、つべこべ言うな！ お前が勝ったら船は小英のもの、お前が負けたら俺のものだ！」

チャントウズ

張 禿子は態度が横柄だっただけでなく、作戦についても自信がありそうだった。足をドンと踏み鳴らし坊主頭を揺らし、一声ほえるや飛びかかってきた。

すごい勢いだったので、小坡シャオポーはこれは頭突きを使わなければ勝ち目はないと考えた。小坡は相手の両手をはね上げ、お尻から頭のとっぺんまでに力を入れて、張禿子の腹めがけて頭突きを食らわそうと突進した。張禿子も、これまでに強い相手を戦ってきているし、小坡の頭突きが有名なのは知っていたので、急いで息を吸って、お腹を引き締め、体をすりと横に向けて小坡の頭突きをかわした。小坡が頭突きをするときは相手の足の動きだけを見て、首と背中犠牲にした。小坡は張禿子の足が横に動いたのを見ると思った。「おっと、背中を打つんだな」そのとおり、背中にはげんこつをバンバンバンバンバンと食らった。胸と口の中にまでバンバンバンバンバンと音が響いてきたようだった。張禿子が人をなぐるときは、いつもきっちり五回音が鳴ってとても面白い。小坡は急いで後ずさると、間隔をあけ、両手を振り回し、また頭突きを食らわした。

あっ、張禿子の足がまた横にどいて、頭にぶつかったのは空気だけだ。バンバンバンバンバン。背中を五回なぐられた。ああ、首もやられた。ただ頭を低くして聞いているしかない。頭を上げたら首をつかまれて打ち倒されてしまうだけだ。作戦変更だ。後退せずに前に攻めて張禿子の足をつかみ、短距離で頭突きをドンドンと食らわすんだ。やっとのことで相手の太った足をつかんだが、背中を何度もなぐられた。払った犠牲は大きい！ かまうもんか、足をつかんでさえいけば何とかなる。あれ、やっぱりだめだ。近すぎて当たっても威力がない。背中のバンバンバンバンバンはさらに激しくなった。

「小坡がもう終わりだ！ 小坡がもう終わりだ！」見物人が口ぐち叫んだ。「小坡は少しばかりあせった。とっさに思いついた。小坡は張禿子の足を放し、すりと張禿子の背中に回った。張禿子はちょうど頭を上げて得意げになぐったいた

のだが、げんこつが空を切り、見ると小坡シャオポーがいない。急いで振り向いたとたん、ドーンと、お腹に大きなゴムボールのようなものが、いやゴムボールより硬いものがぶつかった。

「あっ、小坡の頭だ」

小坡の頭のことを考えると、心の中のつかい棒が無くなったしまったようになった。両手を前に振り回せず、頭を抱えているようなかっこうで、まるで何か難問でも考えているような図になった。お腹は完全に前に出てしまって、さあ、もう一回突け、と言わんばかりになった。案の定ドーンと来た。「ああ、倒れるー」と張禿子は思った。そのとおり、ふらふらして足が地面から離れ体が後ろに飛んでいった。耳元でピューと風の音がした。

「ザーッ！」坊主頭がヒメユリの茂みの中に突っ込んでいった。

「終わりだ、ごめんよ」小坡は片方の手で額をなで、もう一方の手で首をさすりながら言った。

「終わりだ、ごめんよ」張禿子チャントウーズの声が、一輪の大きな赤いヒメユリの下から聞こえてきた。

見物人たちがやってきて、張禿子を茂みの中から引きずり出した。張禿子は腹を両手で押さえながら言った。

「残念だな、このヒメユリはいい匂いがしない」

小坡は木の根元から船を拾い上げると、ヒメユリの茂みをまわって運動場に行き、小英のところに行った。小英は低い木にそばで待っていた。

「ああ、小坡！ 小坡！ みんな聞いたよ。張禿子をバンバンってやっつけたんだって！ほんとにスカッとした」と、小英は足で地面をドンドンと踏み鳴らしながら言った。

「ほら、君の船だよ、小英。ちゃんと持っていなきゃ。まただれかに取られない

ようにね」

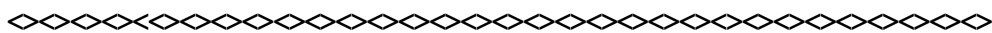
シャオボー

小坡は船を小英に渡しながら心の中で言った。

「勝ったことは勝ったけど、背中がまだひりひりしている」

「でもいいさ。チャントウズ張 禿子もこれからはもう女の子をいじめるなんてことはしないだろう！」

小坡はひとりごとを言いながら教室に向かった。「おまえのパンチはすごかったよ。ぼくの頭突きもすごかっただろう！」



(中国語原文)

(七) 学校里

到了学校里，小坡的第一件事是和人家打起来了，假如你们知道小坡打架的宗旨，你们或者不至于说他是好勇斗狠，不爱和平了。小坡的打架，十回总有九回半是为维持公道，保护别人呀。尤其是小姑娘们，她们受了别人的欺侮，不去报告先生，总是来找小坡诉苦。小坡虽然还在低年级，可是一见不平的事儿，便勇往直前，不管敌人的胳膊比电线杆子还粗，也不管敌人的腿是铁打的还是铜铸的。打！没有别的可说！人们仗着胳膊粗，身量大，去欺侮人，好，跟他们拚命！

小坡到拚命的时候，确也十分厉害。双手齐抡，使敌人注意上部，其实目的是用脑袋撞敌人的肚子。自然哪，十回不见得有三四回恰好撞上，但是，设若撞上呀，哈！敌人在三天之内不用打算舒舒服服地吃香蕉了！

小坡的头是何等坚硬！你们还记得：他和妈妈上市买东西去，不是他永远把筐子，不论多么沉重，顶在头上吗？再说，闲着没事儿的时候，他还贴着墙根，两脚朝天，用脑袋站着，一站就是十来分钟。有经过这样训练的脑袋，再加以全身力量做后盾，不要说撞人呀，就是碰在老山羊头上，也得叫

山羊害三天头疼！据被撞过的人说：只要小坡的脑门触上你的肚皮，得啦，你的肚皮便立刻贴在脊梁骨上去，不好受！

小坡对于比自己身量矮，力气弱的呢，根本不屑于这么费“脑力”——脑袋的力量，他只要手拍脑门然后一指敌人的肚子，敌人便没有别的办法，只好认罪赔情。

对于“个子”、力气差不多与小坡相等的，他也轻易不用脑袋，用拳头打胜岂不更光荣，也显着不占便宜啊。到底是小坡，什么事都讲公道！

还有一类小孩呢，好欺侮人，又不敢名正言顺的干，偷偷摸摸地占小便宜儿，被人指出过错来，不肯认罚，听人家跟他挑战，便赶紧抹着泪去见老师，小坡永远不跟这样的小鬼儿宣战，只是看见他们正在欺侮人的时候，过去就是一拳，打完再说。被打的当然去告诉先生，先生当然惩罚小坡。小坡一声不出，低头领受先生的罚办。他心里说：反正那一拳打得不轻！至少叫你三天之内不敢再欺侮人！

“操场的树后面见！”是正式挑战的口号。

这个口号包括着许多意思：操场东边有一排密匝匝的小山丹树，剪得整整齐齐的，有三尺多高。这排红花绿叶的短墙以后，还有块空地。有几株大树把这块地遮得绿荫荫的，又凉爽，又隐僻，正好作为战场。到这儿来比武的，目的在见个胜负，事前事后都不准去报告先生们的。打完了的时候，胜家便说：“完了，对不起呀！”败将也随着说：“完了，对不起呀！”假如不分胜负，同时倒在地上，便喊个一，二，三，一齐说：“完了，对不起呀！”这样说，虽是打了架，而根本不伤和气。所以小坡虽常常照顾这块地方，可是并没和谁结下仇恨。

现在我们应当低点声儿说了！小坡，这样可爱的一个小孩儿，原来也有时候受贿赂，替人家打架。“小坡，替我和王牛儿打一回吧！他管我父亲叫

大洋狗！”一个小魔鬼手里握着五张香烟画儿。“打倒王牛儿，这全是你的，保管全是新的！”

小坡一劲儿摇头，可是眼睛盯着小魔鬼的手。

小魔鬼递过一张来。

小坡迟疑了一会儿，接过来了，舍不得再交还回去，果然是骨力硬整，崭新的香烟画！

“你先拿着那张，打赢了之后再给这四张！”小魔鬼张开手，不错，还有四张，看着特别的可爱。

“输赢总得给我？”小坡的灵魂已经被小魔鬼买了去！

“打输了哇？吹！打赢了？给！你常打胜仗，是不是？”小魔鬼的话说得甜美而带力量。

“好了，什么时候？”小坡完全降服了。

“下了第二堂，操场后面。”

“好吧，那儿见！”小坡把画儿郑重的收好，心中十分得意。

时间到了，大家来到大树底下。

打！哎呀，自己的脑袋没有热力贯着，一撞就撞了个空。

拳头也只在空气中瞎抡，打不着人。敌人的拳头雨点般打来，打在身上分外的疼。而且好像拳拳打在小坡的良心上了！只觉得疼，鼓不起勇气来！心中越惭愧，手脚越发慌。每拳打在身上都似乎是说：要人家的洋画，不要脸！哪！……结果，被人家打倒在地！王牛儿得意扬扬的说：“完了，对不起呀！”小坡含羞带愧的说：“完了，对不起呀！”

呸！呸！呸！——小魔鬼的声音！

以后再也不这样干了，多么丢脸！为争公道的时候，打得多么有力气，打输打赢都是光荣的；为几张香烟画打的时候，头和豆腐一样软，而且心里

何等的难过！况且事后一打听，原来是小魔鬼先说：王牛儿的姐姐长得像只小老鼠，王牛儿才反口说他父亲像大洋狗。

“小坡！”后来又有一个小魔鬼捧着一把各色的花蛤壳，“你和李三羊打。”

小坡没等他说完，手遮着眼睛就跑开了。

我们往回说吧。小坡进了校门正问看门的老印度，在新年的时候吃了什么好东西，听了什么好笑话。背后来了个小妞儿，拉了他一把。回头一看，原来是同班的小英。她满脸是泪，连脑门上都是泪珠，不晓得她怎么会叫眼泪往上流。

“怎么了？小英！”

小英还是不住的抽搭，嘴唇张了几次，吃进去许多大咸泪珠，可是说不出话来。

“怎么了，小英；别哭，吃多了眼泪可就吃不下饭去了！”小坡常见妹妹仙坡闹脾气哭喊的时候，便吃不下饭去，所以知道吃眼泪是有碍于饮食的。

小英果然停住哭声，似乎是怕吃不了饭。她委委屈屈的说：“他打我！”

“谁？”小坡问，心中很替小英难过。

“张秃子！打我这儿！”小英的手在空中随便指了一指。

小坡看了看小英的身上，并没有被打的痕迹。或者张秃子打人不留痕迹的，也未可知。反正小英的眼泪是真的，一定是受了委屈。

“他还抢去一只小船，张秃子！”小英说。

小坡有点发糊涂：还是那只小船叫张秃子呢？还是张秃子抢去小船？

“小船？”他问。

“纸折的小船，张秃子！”

小坡决定了：这一定是张秃子（人），抢去张秃子（小船）。

“你去告诉了先生没有？”

“没有！”这时小英的泪已干了，可是用小指头在眼睛上抹了两个黑圈。

“好啦，小英，我去找张秃子把小船要回来。”小坡说着，撩起老印度的裙子给小英擦了擦脸。老印度因为开学，刚换上一条新裙子，瞪了小坡一眼。

“要回小船还不行！”小英说。

“怎么？”

“你得打他！他打了我这儿，张秃子！”小英的手指又在空中指了一指。

“小英，他要是认错儿，就不用打他了。”小坡的态度很和平。

“非打他不可！张秃子！”

小姑娘们真不好惹！小坡还记得：有一回妹妹仙坡说，拉车的老牛故意瞪了她一眼，非叫他去打牛不可。你说，万一老牛真有意打架，还有小坡的好处吗？经过长时间的辩论，不行，妹妹是“一把儿死拿”，一点儿不退步。最后小坡急中生智，在石板上画了只老牛，叫妹妹自己去打，算是把这斗牛的危险躲过去了。

“好啦，小英，咱们先上教室去吧。”

小英和小坡刚进了讲堂，迎面正好遇见张秃子。张秃子一看，小坡拉着小英的手，早明白了其中的典故儿，没等小坡开口，他便说了：

“操场的树后面见哪，小坡！”

“什么时候？”小坡问。

“现在就走！你敢不敢？”张秃子的话有些刺耳。

“你先去，等我把衣裳脱了。”小坡穿着雪白的新制服，不敢弄脏。脱了上身，挂在椅子上，然后从书袋中掏出红绸宝贝，围在腰间，既壮威风，又省得脏了裤子。

“小英，你看我一围上这个宝贝，立刻就比张秃子还高了许多，是不是？”

“真的！”小英一看小坡预备到战场去，拍着两只小手，连话也说出来了。

大树底下，除张秃子与小坡之外，还有几个参观的，都穿着新制服，坐在地上看热闹。

由树叶透进的阳光，斑斑点点射在张秃子的秃头上，好想个带斑点的倭瓜，黄腊腊儿的带着些绿影儿。张秃子虽然头发不多，力气可是不小。论他的身量，也比小坡高好些，胳膊腿儿也全筋是筋、骨是骨的，有把子笨劲。

可是小坡一点没把这个倭瓜脑袋的混小子放在心里。他手插在腰间，说：

“张秃子，赶快把小英的小船交回去！再待一会儿，可就太晚了！”

张秃子把那只小纸船放在树根下的青苔上，然后紧了紧裤带，又摸了摸秃脑袋，又咽了口气，又舔了舔嘴唇，又指了指青苔上的小纸船，又看了看旁边坐着的参观者，又捏了捏鼻子，这才说：

“打呀！不用费话，你打胜，小船是小英的；你打败，小船归我啦！”

张秃子不但态度强横，对于作战也似乎很有把握。把脚一跺，秃头一晃，吼了一声，就扑上来了。

一看来得厉害，小坡算计好，非用脑袋不足以取胜。他架开敌人的双手，由尾巴骨起，直至头顶，联成一气，照着张秃子的肚子顶了去。张秃子也是久经大敌的手儿，早知小坡的“撞羊头”驰名远近，他赶快一吸气，把肚子缩回，跟着便向旁边一偏身，把小坡的头让过去。

小坡每逢一用脑袋，便只用眼睛看着敌人脚步移动，把脖子，脊梁一概牺牲。他见张秃子的脚挪到旁边去了，心中说：“好，捶咱脊背！”果然，啷当啷当啷，背上着了拳，胸中和口腔里还似乎有些回响。张秃子打人有这

样好处：捶人的时候老有声有韵的，唧当唧当唧，五声一顿，不多不少，怪有意思的。

小坡赶快往后退，拉好了尺寸，两手虚晃，头又顶上前去。

嗨！张秃子的脚又挪开了，头又撞着了空气！唧当唧当唧，背上又挨了五拳。哎呀，脖子上也唧当开了。只好低着头听响儿，一抬头非叫敌人兜着脖子打倒不可。得换些招数了：不往后退，往前死攻，抱住张秃子的腿，给他个短距离的碎撞。好容易得着敌人的胖腿，自己的背上不知唧当了多少次了，牺牲不小！不管，只要抱住他的腿，就有办法了。唉！还是不好，距离太近，撞不上劲来，而背上的唧当唧当唧更响亮了。

“小坡要完！小坡要完！”参观人这样乱说。

小坡有点发急了！

急中生智，忽然放了张秃子的腿，“急溜的”一下，往敌人背后转去。张秃子正扬着头儿捶得有趣，忽然捶空一拳，一低头，唉！小坡没有了。忙着转身，身儿刚转好，唧！肚子好像撞在个大皮球上，可是比皮球还硬一些。“啊！小坡的脑袋！”想起小坡的脑袋来，心中当时失了主心骨儿。两手不往前抡，搁在头上，好像要想什么哲学问题。肚子完全鼓出去，似乎说：来，再撞。果然，唧！我要倒下，他心里想。果然，不幸而言中，晃晃悠悠，晃晃悠悠，脚不触地，向后飞去，耳旁忽忽的颇有风声。咯喳！秃脑瓜扎进山丹树叶里面去了。

“完了，对不起呀！”小坡一手摸着脑门，一手搓着脖子说。

“完了，对不起呀！”张秃子的嘴在一朵大红山丹花下面说。

参观的过来，把张秃子从树叶里拉出来。张秃子捧着肚子说：“可惜，这些山丹花不很香，不很香！”

小坡从树根下捡起那只小船，绕过山丹树，到操场来找小英。她正在矮树旁边等着呢。

“哟！小坡！小坡！我都听见了！你唧唧唧地打张秃子，真解恨！解恨！”小英跺着脚说。

“这是你的小船，小英。好好的拿着，别再叫别人抢去！”

他把小船交给小英，心里说：“唧唧唧地打张秃子，那敢情好！打张秃子，我脊背上可直发烧！”

“可是有一样，张秃子以后也许不敢再欺侮小姑娘了！”小坡自言自语地往教室里走。“你捶的痛快呀，我顶得也不含糊！”

(『中国名家经典童话—老舍选集』 同心出版社，北京，2009，pp. 73-81, .)

